

---

## 第七話

### 将門僉議事付公連諫死事

『前太平記』上 卷第一 二十八頁から三十二頁より

---

#### [将門謀反の評議を行う]

まもなく、将門は仲間を集めて、謀反の相談をしたが、（皆の）意見は区々で、主張は多岐にわたるものである。その中で、御厨三郎将頼が申し上げたことは、

其説端多し。

「合戦の中の世の常は必ずしも兵の多かれ少なかれによらず、ただ人の調和と不和によっているものだ。それゆえにまず廻文の公文書をお作りになり、諸国の軍勢を呼び寄せて人の心中を伺い見たく存じますれば、皆々様はどのようにお思いになりますか」と申し上げると、権守の興世が進み出て申し上げたことには、「一つの国を奪い取るにしても、東国すべてを奪うにしても、その罪は同じだろう。はじめに常陸国に攻め入り兵を指揮して、まっすぐに下野に移り国司を追放して、上野まで入り武蔵相模を攻略し安房上総を服従させて、関八州を手に入れるようなことは、踵をめぐらす時間もないはずだ（→容易に事を進めることができるはずである）」

踵を廻らすべからず

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にしていただいて結構です。※※※

と遠慮もなく申し上げたところ、将門はほくそ笑んで、「謹んでその進言申し受け

いしくも承るものかな。

ようぞ。俺が東八箇国を打ち下せば、その勢いをもって圧倒して都に上がり、帝を遠島に流し新皇帝と仰がれ、四海を手のひらに収めるようなことに何の問題があるだろうか」と、評議は早くもまとまった。

### 【公連将門を諫む】

この時、将門の従弟である六郎公連という、遠くの末座に座っていたものが、涙をはらはらと流し、「ああ、情けないことよ。このような恐れ多い計画はありません。天地創造以来、天子を殺め、国家を治める者は、中国・日本にもいまだ前例を

天開け地開けしより以来、君を弑して 宗廟を保つ者、 漢家本朝未だ其先蹤を聞かず。

聞きません。今、天子の威光は治国の外にまで及び、家臣は国中に満ちている。どのような不満があって、このように決心なさるのですか。武運、早くももうここま

武運 早 斯うと覚え候。

でと思われま。お上の仰せに従い下々の百姓を安らかにしてこそ、子孫の無限の栄華もお極めになるのではないのでしょうか。そもそも、天皇の位であることは人皇

抑万乗の帝祚たること

の始めである神武天皇が、御禪譲を鷗鷺草葺不合尊よりお受けになられてから、今上帝にいたるまでもう六十一代となり、八咫鏡・草薙の剣・八尺瓊勾玉によって、位を譲り即位なさるのです。これは我が国の慣わしであり、神代からの規則であります。ところが、祖父の高望王よりこのかた、人臣に数えられ今また政道をさげすみ、四海の民を苦しめようとの計画は天誅をどうやって免れましょうか。伝え聞くところ、漢の王莽は天子の位を奪い、平帝を殺め独立し孺子嬰を位からどけ、国の名を変え新と称し、漢の高祖の廟を壊し自らを新皇帝と名乗りました。手荒に略奪して万民はこれに苦しみ、ついに漢の諸軍の力で誅殺され、王氏一族は皆全て滅亡し、後漢の皇位は総じて百九十五年続きました。後に、唐の安禄山は欺いて楊貴妃と母子の親交を固めようとすることを求める。玄宗は愚かで、これを見過ごしてしまう。それから禄山は貴妃を褒め称え、母と呼ぶようになる。ひっそりとこの者に内通し、共にだまして代々の近臣たちを虚偽の言葉で混乱に陥れ、殺される者がたいそう多かった。ついに天宝十四年に兵を起し、長安城を攻め落とし、内密に雄武皇帝と自称したが、己が子の安慶緒の手で命をおとす。わが国で廢帝の御代では、藤原恵美押勝が孝謙帝の寵愛という名誉を受け、太政官の印を手にし、軍兵をお呼び集めになり朝廷を滅ぼそうとしたが、坂上苺田麻呂並びに藤原良繼たちがみことのりをお受けして、官軍を率いて近江国に陣をとった。押勝は戦いに負けて石村村主（坂上石楯）の捕虜となり、郎党は皆さらし首にされた。ここ最近では、ご

先祖の桓武帝の御代に因幡氷上川継が謀叛を企て、宮中に夜討ちをしようと思論んだが、事の次第はとつくに露呈しており、伊豆国に島流しにされた。この処置は

是は

光仁天皇が崩御され、世の中が喪に服していたために、最高刑の死罪を避け（都に

光仁天皇崩じさせ給ひ、

天下諒闇たるにより、

死罪一等を宥め、

二度と戻らぬ様に）不返の流罪に処したのだった。その他にも武埴安彦や、筑紫の

不返の遠流に処せらる。

熊襲、住吉仲皇子、蘇我入鹿、長屋王、太宰少弐広嗣。奥州の伊治咩麻呂と達谷窟高丸は、利仁将軍に射殺される。一人として野望を遂げる事叶わず、すぐに天罰を

一人として素懐を遂げず、

忽ち天の譴めを蒙る。

受ける。私がここで願うならば、惨たらしい反乱の計画をお止めになって、民を慈しむ政を功績を行ってほしいです」と、言葉の限りを尽くし、道理を明らかにし、意見を残すことなく申し上げたところ、将門はたいそう気分を害し、「おい、公連

「やをれ公連よ。

よ。お前の心の歪みに任せ、人も納得させられないような能書きを並べて、会議の

己が便佞に任せ、

人も服せぬ理を説ひて

評定の

席を妨げてくれたな。はるか昔の異国を聞くと、殷の紂王の政治は無道なもの

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

席を妨ぐ。

であったが、周の西伯（文王）がこの者を討ち取り、周王朝は長く続いた。漢の高祖は沛の役人から始まって、秦を攻め楚に勝って、天下を漢に服させること、二百

漢の高祖、沛公より起こつて、

十四年。最近だと我が国の太古、武烈天皇が薨去してから応神天皇から五代目にあたる孫の彦主人の子を位に立てて、天子とした。二十七代目の継体天皇がこの方である。俺はそのまた桓武天皇の五代目の孫で、皇位を継ぐ(素質)には足りている。前例はないことはないのだ。今、お前が申し上げるところの逆臣は皆心の内の勇気

先蹤無きに非ず。

今汝が申す処の逆臣、

皆己が勇気智謀

と知恵、計画を兼ね備えてはいなかったからで、その宿願を果たすことが出来なか

兼備せざるに依つて、

其本懐を得ず。

った。彼の者たちをもって、俺に例えること、不思議であること限りない。今、一

彼を以て

我に比する条、

奇恠余り有り。

今一言

言述べるならば、まさしく、その席を立たせまい（→この作戦を降りることは許さ

に及ばず、

方に

其座を立たせじ」

ないぞ）」と、鏡の面に朱をといて注いだような眼を荒らげ、ギロリと睨んで、

と、鏡の面に朱を溶いて洒ぎたる眼をあらゝげ、

はつたと睨むで

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

申し上げたところ、座中の一同、その威勢に恐れては、一言も発する者もなく、

申しければ、 皆 其権勢に畏れつゝ 一言出だす者も無く、

座中はひっそりと静まったのだった。

座中ひっそりと静まりける。

### [公連諫死す]

公連がもう一度申し上げたことは、「再び言葉を言うなれば、首をおはねになろうとしますこと、これは義士の望むところである。どうして一命を物惜しみして、私の主張をなくそうか。そもそも、継体天皇が天皇であることは武烈天皇が崩御して子がなく、それゆえに、臣下たちが相談して、継体天皇を迎えて天皇に即位させる。継体天皇が辞退しようとした回数は五度に及んだ。諸卿は必死に即位をおすすめ申し上げたことによって、口を噤むことが出来ないようにして、ついに即位なされた。また、周の文王は紂王の非道を憎み、天下の苦しみを気の毒に思い、この思いが静まることが出来ずして、天に代わって紂王を討つ。このために民がこれ(文

是の故に、民の之を

王の即位)を望むことは、大日照りに雨を待ち望むようなことだ。市(都?=文王

望むこと、 大旱に雨を望むが如し。 市に

の治める国?)に帰順する者は止まることなく、雑草取りに精を出す者(小さな仕

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL(月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>)をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

帰する者止まず、

転る者

事をする身分の低い者?)も変わることなく、民衆はたいそう喜んだ。これ以上な

変ぜず、

民大きに悦べり。

い。一人を天誅して、万民を安らかにすると。周の文王はその通りであり、漢もまた同じようである。故事をもって、今と比べると、瓦石をもって、金の玉に例える

古を以て

今に比せば、

瓦石を以て 金玉に譬ふるに似たり。

ようなものだ。この折を同じものとして語るべきでない。彼らは理世安民（世を治

日を同じふして語るべからず。

彼は理世安民の

め民を安らかにする）の政治、こちらは聚斂私欲（過重の租税を取り立て、好き放

政、

是は聚斂私欲の

題すること）の計略である。現に今、穏やかな波が四海に溢れ、民衆は皆（その恩

謀。

民皆

恵を享受し、）立派な生活を誇る。そうであるのに、武器を国中に振りかざそうと

堂々の化に誇る。

するなど、恐ろしや恐ろしや。災いがすぐさま国の中から起こって、命を戦場の下

禍忽ち蕭牆の内より起こって

に落とし、（世の）嘲笑を永遠に後世にお伝えになるようなこと（になるのは）、  
手のひらを指さすようなことだ（あまりにも明白である）。滅亡が訪れる国には入

掌を指すに似たり。

危邦には入らず、

らず、乱れた国に腰をすえることはない。忠臣が主を諫めて、反論され、聞かない

乱邦には居らず。

ときは、すぐにその国を去るのだ。私、公連は諫言を数度も行った。伯夷・叔齊<sup>(巻)</sup>  
は飢えて死んだ。例に出すにもまだある。竜逢・比干<sup>(武)</sup>は諫め（たのにもかかわら  
ず受け入れられず）死んだ。どれだけ（彼ら）を褒め称えても余りある。及ばない  
だろうなあ。身を潔白にして死のうとすることに」と、いい終えずして、帯から上

如かじ、

身を潔うして死せんには」

と云いも敢えず

の着物を脱ぎ、左の小脇に刀を突き立て、右の脇腹まで切り口を長く掻き切って中

押し膚脱ぎ

左の小脇に刀を突き立て、

右の傍腹まで切目長く掻き破つて、

の内臓を手繰りだして、うつぶせに倒れてしまった。座中はこれによって、興がそ

中なる腸手繰り出だして、

覆しに臥したりける。

がれて、その日の評議はこれにておしまいとわかった。扶蘇<sup>参</sup>は殺されて、秦の世  
は滅び、伍子胥<sup>肆</sup>が死んで、呉王は身を滅ぼした。滅亡は遠くはないと、知恵のあ

廃亡遠きに非ずと、

智ある人は



る人は嘆いていた。

嗟嘆せり。

---

## 注釈

※壺・伯夷・叔齊……中国の古代伝説上の賢人兄弟。孤竹国の公子。周の武王が殷の紂王を討つのは不義であるとし、首陽山に隠れ、蕨のみを食し、餓死して清節を保ったという。

※武・竜逢・比干……夏の君主、桀に仕えた「竜逢」と、殷の君主、紂に仕えた「比干」のこと。どちらも暴君を諫めた忠臣。

※参・扶蘇……秦の始皇帝の長男。偽命によって自殺させられた。

※肆・伍子胥……春秋時代の呉の家臣。讒言によって殺される。

---

多くの故事が出てくる回ですね。改めて藤元元の教養が深いことが伺えます。

今回、公連が切腹して己の身を潔白にして自殺したことは、なんとなく江戸時代の文学らしさを感じます。しかし、公連は実際に将門を諫めていた存在のようですが、この後も生きて朝廷側について戦ったようです。また、余談ですが、日本初の切腹での自殺は110話で登場する藤原保輔だったといわれております。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m(\_\_)m

公開：2015/5/23

改訂：2021/3

海熊童子